5/18 甲状腺検査 公開報告・交流会、今後の予定など

甲状腺検査 公開報告・交流会 2019年 5月18日(土) 13:30~15:40 (原明13:00~) 東北教区センター「エマオ」(仙台市青夏区級町1-13-6)

5月18日(土) 13:30~ エマオにて

いずみ甲状腺検査2018年度結果公開報告・交流会を開催いたします。子どもたちや未来世代のためにできること、ご一緒に考えていきましょう。詳しくはチラシやHPをご覧ください。

【開催報告】 (講演動画公開のお知らせ)

西尾正道 医師 講演会「内部被ばくを考える」

昨年10月21日(日)、仙台市内で上記講演会を行いました。

北海道がんセンター名誉院長である西尾先生は、約3万人のがん患者と向き合ってこられた放射線治療医です。自らも被ばくを伴う粒子線源やCs-137針線源など、局所被ばくを人為的に活用した豊富な治療経験から、局所的な被ばく量を全身化換算したり、平均化することは非実態的であることをご指摘され、さらに、不溶性セシウムなどや、トリチウムによる内部被ばくのメカニズム、危険性を詳しくご説明されました。

「原発事故による健康被害はない。」かのような主張や風説ばかりが取りざたされますが、臨床現場での豊富な経験に基づいた誠実なご講演は貴重でした。いずみHPにて動画公開しています。どうぞご覧ください。

講演動画URL http://tohoku.uccj.jp/izumi/?p=10085

甲状腺検査の予定 (詳しくはいずみHPをご覧ください)

甲状腺エコー検査 in 石巻市 5月26日(日) 於:石巻市「石巻中央公民館」

甲状腺工コー検査 in 名取市 6月29日(+) 於:名取市「名取教会」

「いずみ」の活動は国内外の支援活動によって支えられています。この活動を続けていくためにみなさまのご支援、ご協力をお願いいたします。献金、ご支援は下記専用口座をご使用下さい。

ご支援のお願い

送金先金融機関 ゆうちょ銀行

口座番号 02270-2-114887

加入者名 いずみの会

通信欄に 会費(一口2000円から)、又は、献金(支援)とお書き下さい。

※開所時間変更のお知らせ

2019年4月から、いずみ事務所の開所時間を平日10~16時と変更いたしました(これまでは平日9~17時)。 ご不便おかけするかもしれませんが、ご理解いただきますようお願いいたします。

運営委員長 布田秀治(いずみ愛泉教会)

運営委員 明石義信(常磐教会) 鈴木のぞみ(川俣教会)

保科 隆(福島教会) 布田秀治(いずみ愛泉教会)

室 長 保科 隆(福島教会)

顧 問 篠原弘典(原子核工学専門家)

スタッフ 会津かよ子 笠松絹子 服部賢治

会計協力 渡辺広衛

日本キリスト教団東北教区 放射能問題支援対策室いずみ

UCCJ Tohoku District Nuclear Disaster Relief Task Force "IZUMI"

〒980-0012 仙台市青葉区錦町1丁目13-6

TEL/FAX 022-796-5272 メールアドレス izumi@tohoku,uccj.jp

8

ホームページ http://tohoku,uccj.jp/izumi/



日本キリスト教団東北教区放射能問題支援対策室いずみ ニュースレター第12号 2019年 4月26日発行



題字 丹治正雄氏

寄稿 原子力の終わりの始まりを見つめて 放射能問題支援対策室いずみ顧問 篠原 弘典

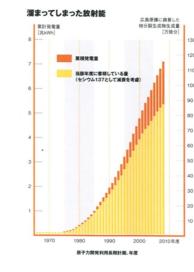
福島原発事故から8年が経ちました。現在でも福島県で故郷を追われて県外・県内に避難している人々が4万人以上おり、苦しみは続いています。

この現実があるにも関わらず、なお原発を再稼働させようとする動きは続いていて、身近な女川原発2号機の再稼働に向けた原子力規制委員会での安全審査は最終盤を迎えています。この動きに対して宮城県では女川原発の再稼働の是非は県民投票で決めようという条例を作る運動が起こっています。村井県知事はこの直接請求に対して「島国である我が国は資源が少なく、国策として原子力政策が進められてきた経緯があり、重要なベースロード電源とされている」との見解を明らかにしていますが、福島原発事故以降この国策はいたるところで破たんを見せており、原子力の後始末の時代が確実に始まっています。

東日本大震災発生時に国内で動いていた原発は54基で、現在ではそのうち19基の廃炉が決定しており、稼働中は9基だけです。政府のエネルギー基本計画では2030年度に原発で20~22%のエネルギーを賄うとされていますが、現状では絵空事です。現在まで作り出してしまった放射性廃棄物とこれから出る廃炉廃棄物の処分をどうするのかが、これから逃げられない問題として起こって来ます。

日本で原発の稼働が始まったのが1966年の東海原発1号機からですが、それから原発は電気も作って来ましたが、同時に大量の放射性物質(死の灰)も作って来ました。ウランの核分裂を利用する限りそれは避けられない事です。この50年あまりで原発が生成した放射能は広島原発で撒き散らされた放射能(約3000キューリーと評価されています)の120万発分になっています。放射能は時間とともに減って行きますから、現在残存しているのは80万発分位ですが、それが使用済核燃料、再処理された高レベル廃棄物と中・低レベル廃棄物、ドラム缶に詰められた低レベル廃棄物の形で、全国の原発、国内外の再処理工場、様々な原子力施設に保管されています。それに加えて廃炉が進めば、この放射能は様々な形態となり量的にも増大します。

昨年8月の新聞が、岡山県の人形峠にある環境技術センターが低レベル廃棄物の敷地内での試験埋設を始めるとの動きを伝えました。日本で原子力開発の動きが始まろうとする1955年に人形峠でウラン鉱床の露頭が発見され、ここにウラン採掘、精錬、転換、濃縮の核燃料サイクルの始まりの部分の研究施設が作られましたが、その施設も役割を終えつつあり、ウラン粉末で汚染された廃棄物のドラム缶を敷地内に埋設する試験研究を始めるとの報道です。「敷地内処分の流れ加速」との見出しが付いています。



日本の原子力発電 による累積発電量と 核分裂生成物の累 積生成量

2ページに続く

1ページから 原子力の終わりの始まりを見つめて いずみ顧問 篠原 弘典

いたる所で放射性廃棄物の中間貯蔵という言葉が使われていますが、危険物である放射能の最終処分場を 引き受ける所を探すのは困難を極めますから、これから発生する廃炉廃棄物も含めて原子力施設内での敷地 内処分の流れが強まって行くでしょう。

東北電力は昨年10月女川原発1号機を安全対策工事に巨額の投資が必要になり採算が合わないとして廃 炉にすることを決定しましたが、廃炉で6300トンの低レベル廃棄物が発生し、廃炉費用が419億円に なるとの試算を発表しています。これまでに積み立てた額では123億円足りず、これから段階的に電気料 金に上積みして徴収することにしています。

昨年原子炉等規制法が改正されて、国内にある原発や核燃料サイクル施設などの主な商業用原子力関連施設に対して、施設を廃止する場合の実施方針の公表が義務付けられましたが、昨年末に各事業者から公表された試算では、発生する低レベル廃棄物は52万1000トン、掛かる費用は12兆8000億円になると明らかにされました。全て国民負担になる負の遺産です。

核燃料サイクルが完成すれば無尽蔵のエネルギーが得られるという神話を振りまいて国策として始まった原子力開発ですが、その要である高速増殖炉「もんじゅ」も廃炉になり、六ヶ所再処理工場も当初2009年2月竣工とされていたのが、度重なる延期で現在でも動いておらず、建設費は7600億円から3兆3700億円に膨らんでいます。「もんじゅ」の失敗を糊塗しようと国は高速炉の開発方針を示していますが、岡芳明原子力委員会委員長が「予算と人材浪費」だとして異論を公表しています。また原子力規制委員会の田中俊一初代委員長も3月初めの講演で、「再処理工場が本格稼働すれば日本のプルトニウム保有量が更に増加するので、核燃料サイクル政策については、やらない方が良い」と指摘しています。夢の核燃料サイクルの破たんは隠しようもありません。

福島原発事故を経験しても政治は脱原発に政策転換出来ないでいますが、多くの人々はこの8年間で原発がもたらした悲劇の実態をしっかりと見つめて来ていて、現在でも世論調査をすれば7割が再稼働反対の意思を示しているのです。

保養参加者の親睦交流会 開催報告

1月18日(金)いわき市・常磐教会、1月19日(土)福島市・福島教会にて、「いずみ」がこれまで実施した保養プログラム参加者を対象とした親睦交流会を開催しました。2日間あわせて、9家族13名の親子がご参加下さいました。

久しぶりの再会、はじめてお会いした方、ゆっくり時間をとり、 打ち解け、おいしいものをいただいたり、時間を気にせず過ごすことが できました。



布田委員によるハーモニカ演奏も!

楽しい時間でしたが、気がかりなこともありました。

日常生活において、放射能による健康への悪影響についての話題を出したり、不安や悩みを誰とも話すことができない(難しい)、ということをお聞きしました。核事故被災地(ここでは福島県内)では、相互の意見交換や対話、検討を積み重ねていくのではなく、これぐらい(の線量)なら「大丈夫」、「まだ気にしてるの!?」とか、「復興」を阻害する、として、意見表明や不安を発することすら自己規制しなければならない抑圧的な状況があり、固定化しています。

この2日間、参加者の方々は、普段、しまい込んでいることを共有したり、分かちあうことができました。 「いずみ」は今後もこのような場を設けていきたいと考えています。

親睦交流会 参加者感想

親睦交流会に参加して

土曜日の交流会、お世話になりました。皆さんの時間を費やして用意してくださったお食事や会場の 設定など本当にありがとうございました。

保養に子どもが参加しなくなってから3年になりますが、子どもを線量が低いところへ連れて行き、 身体を休めてあげることができなくなったことに加えて、自分の悩みをうちあける場所もなくなって しまいました。今日のような会で母親同士、話ができたこと、また支えてくださっている皆さんに再会 できたことはとても嬉しかったですし、これからの支えにもなると思います。

昨年、「東日本大震災」がテーマの授業があり、その中での先生とのやり取りに子どもが傷ついて帰ってきたことがありました。学校での放射線教育は基本「安全」なので、それに沿わない発言をしてしまい、先生からその発言について否定されてしまったとのことでした。

先生に話をしに行こうか迷いましたが、子どもに、人それぞれ放射線に対する考え方はちがうこと、考え方が違うからといって発言を真っ先に否定する先生がおかしいということを話し、そのことはその日でおさめました。でも、そのことが私の中で消化できないままでした。私が良かれと思ってやっていることが子どもの発言につながっていると思ったからです。どうすれば良かったのだろう…これからはどうすればいいのだろう…と悩んでいました。今日参加したお母さんにそのことを打ち明けました。真剣に話を聞いてくれました。さらに、うちはこうしてるよという話もしてくれました。

なかなか放射線の問題については気軽に話をすることができない福島で、素直に自分の悩みを 打ち明けることが出来る時間を作っていただけて本当に感謝です。気持ちがとても楽になりました。

ありがとうございました。

2019.1.20 記

福島市 40 代母

親睦交流会に参加して

福島市で開催された「いずみ保養プログラム参加者」向けの(多分初めての) 親睦交流会に参加しました。福島市にある福島教会は真新しくてとても素敵なところでした。祈りを捧げる場所の空気は清んでいて心地良かったです。

交流会は自己紹介から始まり、お昼をはさんで思いおもいの会話を楽しみました。子供が進学すると保養になかなか参加することが難しくなり、保養先での母親同士の会話の機会が減ってしまいました。日常では交流会でするような内容は全くと言っていいほど話しません。はなしが出来る相手を探すのは大変で疲れてしまいます。今回のような時間を作っていただけると日頃気になっていることや知りたいことなど、気兼ねなく色々な話が出来てストレスを発散することが出来ました。13 時までの予定でしたが、時間を大幅に超えて楽しく充実したときを過ごせました。本当にありがとうございました。

今後もまた機会がありましたら、参加したいと思いますので、是非また企画していただきたいと おもいます。

2019 1 23 記

福島市 40 代母



4

福島・宮城県、東京都内から七家族二十一名の親子が参加第十三回親子短期保養プログラム 5 電美

R催報告]

2

9

9年3月250

3月29

奄美保養参加者の保護者に、"保養"をとりまく状況について、コメント (自由記述)を寄せていただきました。

被ばく回避、リフレッシュ、デトックス、"保養"や取組みについて ご一緒に考えていただく一端になればと共有いたします。

参加者アンケートより (抜粋)

- ◆春休み、冬休みは保養キャンプが少ないので、探すのが大変に感じています。キャンプでなくても、自由行動で滞在できるシェアハウスのような滞在施設(車なしでもOKな)があると、もっと保養に出る回数を増やせるかなと思っています。 東京都 40代母
- ◆多少、自己負担があったとしても保養はあったほうがいいと思います。 福島県 50代父
- ◆東京や仙台から参加できる保養がもともとあまり多くはないのですが、これまで参加できたプログラムや滞在先が保養の提供をやめてしまうことが多く、いつまで保養に頼った生活を続けられるのかと常々不安に思っています。また、提供は続けて下さっていても、交通費補助がなくなってしまったり、参加費用が多く必要になってしまうと、我が家の場合は参加が難しくなってしまいます。少しでも続けようと思って下さる方々、支えて下さる方々が関心を持ち続けて下さっていることに感謝しています。 宮城県 30代母
- ◆今回のつながりを大切に、またリピーターの企画などもあるといいなと思います。 福島県 30代母
- ◆少しづつ保養が減っていくことに不安を感じています。参加する度に最近は保養団体の方から需要はありますか?と聞かれることが増えました。保養の必要性を訴えていかないと、もっともっと少なくなってしまうのではないかと思っています。私自身の意識を高くしてまわりにも伝えていかなければと思います。 福島県 40代母
- ◆保養の機会が減少していて、なかなか日程も合わず、参加できないこともあり、探すのが 大変な状況です。 周りにも参加している方が少ないのが現状です。 福島県 30代母



ようこそ!! 奄美保養参加者のみなさん

- 3/25 (月) 羽田空港集合。航空機利用。鹿児島県奄美大島へ。 到着後、奄美海洋展示館。名瀬教会での歓迎夕食会。交流。
- 3/26 (火) 午前、水中観光船「せと」で加計呂麻島へ。海遊び。 午後、諸鈍小中学校で地元の子どもたちと野外遊び。於斉ガジュマル。
- 3/27 (水) 午前、マングローブパークでのカヌー体験。午後、海遊び。 夜、瀬戸内教会での歓迎夕食会。交流。
- 3/28 (木) 午前、分かちあい。午後、フリー(オプションプログラム)。
- 3/29(金)お買い物。大島紬村見学。航空機利用。羽田空港にて解散。

関係者・関係各所へのお礼(いずみ事務局より)

実施にあたってご協力いただいた九州教区東日本大震災対策小委員会、奄美地区を はじめ、教会員やお世話になったみなさま、カトリック正義と平和仙台協議会、 お祈りいただいたみなさま、全ての関係者に心よりお礼申し上げます。

5

何も解決していない8年間とこれから

終束にはほど遠い事故原発、縮小される支援、形骸化する健康調査、健康不安の持続

東京電力福島第一原子力発電所事故から8年、社会的には本質的な施策実施や解決から程遠い状況が続いています。人や生態系への放射線影響を最小化していくのではなく、むしろ、事故由来の放射線被ばくを受忍させ、晩発的な被ばく影響を軽視、もしくは、向き合おうとしない・無視する傾向がより強まっています。 象徴的な事柄として、真っ先に挙げられるのは、福島県が実施主体となっている県民健康調査、とりわけ、事故当時18才以下の福島県民、子どもたちを対象とした甲状腺検査についてです。

福島県によると、2011年秋以降、これまで、少なくとも211名の甲状腺がん(悪性疑い含む)の方が確認されています。 (2019年4月8日発表 参考資料1より https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/320491.pdf)

例えば、211名という甲状腺がん患者数が本当に実態を表しているのか、という極めて重大な問題があります。県の検査を受けているにもかかわらず、時間がたってから後に甲状腺がんになった方など、報告されないケースがあるからです。それも、一人や二人ではありません。科学的な分析や実態把握という観点からは、報告されるべき甲状腺がん患者がいるのに、実数より少ない患者数しか公表されていません。

加えて、以前は、甲状腺がんの手術をされていた医師が、県の検討委員会などの会議に出席して、具体的な症例を基にした検討ができていたのですが、この数年は現場医師の出席はなく、臨床的な情報開示、症例共有が非常に不十分です。

これらからは、原発事故による健康影響を科学的に検証していく前提となる調査や報告そのものが信頼性に欠けるものであることを意味しています。その結果、放射能による健康影響の有無を確認するための大規模な公的健康調査としては、唯一と言って差し支えない福島県の甲状腺検査が形骸化しつつあります。

その一方、「放射能による健康被害はない」「100mSv以下の被ばくなら安全」「喫煙や飲酒、避難生活 やストレスより被ばくのリスクは小さい」などという"放射能安全神話"が蔓延しています。

そんな中、とりわけ避難者への支援、3月末をもって、福島県などは区域外避難者への住宅支援を個別の 事情や状況把握も不十分な中で一律に打ち切りました。この数年の間には、東電原発事故被害者であり、 避難を続けたいと願う福島県民が避難先から出ていくようにと裁判に訴えられる事態すら起きています。

2019年1月21日、東京新聞にて、事故当初、100mSvの甲状腺等価線量の被ばくをした双葉町の11 才少女がいたにもかかわらず、報告は伏せられた、と報道されました。また、数万人規模の伊達市被ばく線 量調査においては、調査対象者の被ばく累積線量の推計が1/3に少なく見積もられ公表されていました。

放射線防護、余計な被ばくを避ける、という極めて基本・原則的な姿勢からすると、本来、何らか対策をとらなければならない状況が発生していたのに、リアルタイムで情報共有されず、対応はスルーされ、住民にとって不利益な情報が後出しされたり、隠していたのではないか、ということが繰り返されています。

放射性物質は福島県はもとより、県境を越えて飛散し、東日本の広域に深刻な汚染をもたらしました。被ばくによる健康影響への不安は、これまでの国や行政機関などの非双方向かつ信頼性の欠ける対応により、解消されずに潜在化し、持続しています。



甲状腺エコー検査の様子

いずみはこれからも甲状腺検査や保養などの支援事業を長期的に実施、機会提供していきたいと願っています。引き続き、みなさまからのご支援を心よりお願い申し上げます。

6

放射能問題支援対策室いずみ 事務局長 服部 賢治



放射能問題支援対策室いずみ 2018年度甲状腺エコー検査結果

甲状腺検査判定結果 累計表 (2013年12月~2019年3月)

年 度	A1	A2	В	С	検査者数 ※1 (カッコ内大人)
2013~2017年度	1,273人	1,238人	29人	0人	2,540 (26) 人
2018年度	311人	282人	1人	0人	594 (66) 人
総計	1,584人	1,520人	30人	0人	3,134 (92) 人
小数点第二位四捨五入	50.5%	48.5%	1 %	0 %	

判定	内 容	解説	>	
A1	結節やのう胞を認めないもの。	現時点では何も見あたらず問題ありません。		
A2	5mm以下の結節、 20mm以下ののう胞を認めたもの。	小さなのう胞や結節 (しこり) が見つかりました。特に心配することは ありませんが、経過を 観察していきましょう。		
В	5.1mm以上の結節、 20.1mm以上ののう胞を認めたもの。	二次(精密)検査をおすすめします。		
С	直ちに二次検査を要する。	専門医・機関での二次(精密)検査が必要です。		

※1. 事故当時18才以下の子ども を主な対象者とする。

大人、事故後出生者含む。

2018年度 甲状腺検査結果

N o	開催日	実施地域	検査者数	検査医師 (敬称略)		
第49回	2018年4月1日	川崎町	58人	溝口由美子		
第50回	2018年5月13日	石巻市	56人	寺澤政彦		
第51回	2018年6月24日	蔵王町	58人	寺澤政彦		
第52回	2018年7月22日	白石市	39人	溝口由美子		
第53回	2018年9月1日	白石市	35人	寺澤政彦		
第54回	2018年9月15日	柴田町	38人	今川篤子·山崎知行※2		
第55回	2018年10月28日	柴田町	59人	寺澤政彦		
第56回	2018年11月25日	角田市	66人	寺澤政彦		
第57回	2018年12月9日	石巻市	43人	溝口由美子		
第58回	2019年2月9日-10日	仙台市	94人	寺澤政彦·溝口由美子		
第59回	2019年3月16日	栗原市	48人	寺澤政彦		
計 11回 合計 594人(事故時19才以上の大人66人含む)						

7

※2. 山崎知行医師-医療・健康相談、検査結果説明のための参加